

東京・春・音楽祭2020

シューベルトの室内楽 I

～ 鈴木大介(ギター)と仲間たち



曲目解説

第 I 部

シューベルト (鈴木大介編) : ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ ニ長調
D384

3曲の短いソナタが作曲されたのは1816年。おそらく家庭コンサート用に書かれたこれら3曲は、シューベルトの死後に作品137としてまとめられ、1836年に「ソナチネ集」として出版された。その第1番である本曲は、3楽章構成となっており、シンプルで素朴な旋律が味わい深い。

シューベルトの歌曲

「春に」は1826年の作。詩はシュルツ。かつて恋人と寄り添った春を懐かしく思い出す。「緑野の歌」は1827年作曲。詩はライルにより、童心にかえり、萌える緑のなかへ春に誘われて駆けだすような歌。「春の小川」は1816年作曲で、詩はショーバー。三部形式となっており、優しく穏やかな旋律が心地よい。「ガニュメート」は1817年に書かれた優美な曲。ゲーテの詩は、美少年ガニュメートにまつわるギリシャ神話に材を採っている。「僕のものだ!」は、1823年に作曲された歌曲集《美しき水車屋の娘》の第11曲で、詩はミュラー。水車屋の娘の心を得て、この世の春を謳歌するような歌。

メルツ : 《ギター独奏のための6つのシューベルト歌曲》

ヨーゼフ・カスパー・メルツは19世紀前半に活動したハンガリー出身のギタリストで、作曲家としては多くのギター編曲を手がけた。本曲集は、フランツ・リストによるピアノ編曲をもとに、ギター独自の味付けを加えている。

「涙の賛美」は、1818年頃作曲されたシューベルト初期の歌曲。続く3曲、「愛の便り」「わが宿」「セレナーデ」は、いずれもシューベルトの死後まとめられた歌曲集《白鳥の歌》所収。特に「セレナーデ」はシューベルトの歌曲のなかでも有名なものの一つ。「郵便馬車」は、シューベルトの歌曲集《冬の旅》の第13曲。「漁師の娘」は、《白鳥の歌》所収の歌曲。

第 II 部

シューベルト (鈴木大介編) : アルペジオーネ・ソナタ イ短調 D821

ウィーンの楽器製作者シュタウファーが 1823 年に発案したアルペジオーネというフレット付きの弦楽器は、いわばチェロのように弾くギターだったが、普及には至らなかった。1824 年に作曲された本作はアルペジオーネのために書かれたものとしてはおそらく現存する唯一の楽曲で、ヴィオラ、チェロ、ギターなど様々な楽器で演奏されている。3 楽章構成となっており、シューベルトならではの哀愁が随所に感じられ、今日に至るまで広く愛聴、愛奏されている。

第 III 部

シューベルトの歌曲

「春に寄せて」は 1817 年の作。詩はシラーによるが、シューベルトは同詩に四度、曲を付けている。いかにも春らしい穏やかな喜びを歌う。「春の夢」は、ミュラーの詩による歌曲集《冬の旅》の第 11 曲。軽快な前奏に続いて明るく始まるが、すぐに沈んだ気分へと変わってしまう。今回は松尾俊介による編曲でお届けする。「5 月の夜」は 1815 年の作。詩はヘルティにより、美しい春の夜に背を向け、孤独へ向かう心持ちを歌う。「春のおもい」は 1820 年に作曲された。詩はウーラント。伸びやかな旋律は春を歌うにふさわしく、シューベルト歌曲のなかでも広く親しまれている。「春のあこがれ」は、歌曲集《白鳥の歌》の第 3 曲。詩はレルシュタープにより、明るく澁刺とした春を感じさせる歌である。

ギター四重奏曲 D96

“秘曲中の秘曲”であり、演奏機会も極めて少ない。チェコのギタリスト・作曲家のヴェンツェル・トマス・マティーカによる三重奏曲「フルート、ヴィオラ、ギターのためのノットウルノ」を、シューベルトが編曲したもの。全 5 楽章からなる原曲に、チェロを加え、さらにメヌエット楽章のトリオを 1 つ増やしている。1814 年頃に作曲されたと推定されているが、作曲動機は不明で、まだ十代の若きシューベルトが家庭で演奏するために作曲したと考えられている。